

# 九州北部の広葉樹二次林の森林構造

## 九州大学福岡演習林里山試験地での調査結果

九州大学農学部附属演習林福岡演習林 扇 大輔

### はじめに

集落や農地に隣接した広葉樹二次林は、1960年代までは主に薪炭林として人間活動の影響をうけてきた。しかし、これらの森林の多くは燃料供給形態の変革とともに利用価値が低下し、放置されて現在にいたる。一方で近年、奥地の山地森林から連続した半自然、即ち里山とよばれ、農地やため池、そして人間の生活空間および人工的な緑地へと連続する風景と生物の多様性を形成する一部として見直されつつある。

広葉樹二次林に関する研究は数多あるが、伐採によって裸地となった森林の再生過程を調べた事例は少ない。九州大学福岡演習林では、里山に相当する林地で植生を調べた後に皆伐を行い、里山試験地として長期モニタリングを行っている。本発表では里山試験地の皆伐前の森林構造について報告する。

### 方法

2013年8月～2014年1月に福岡演習林10林班い、は小班内の広葉樹二次林に10m四方の調査プロットを30箇所(0.30ha)設置した。調査地は福岡県北部の日本海沿岸からやや内陸部に位置し、ヤブツバキクラス域の照葉樹林帯に属する<sup>1)</sup>。プロット内の胸高周囲15cm以上の個体について、樹種、周囲長、個体位置を記録した。調査地の地形については、東西に延びる丘陵の尾根と作業道に挟まれた狭隘な区域で、標高75～90m、南～東向き斜面、平均傾斜23°である。

### 結果と考察

調査プロット全体での出現種数は33樹種、株立ちを含めた幹数は686本、胸高断面積合計は49.61 m<sup>2</sup>/haであった。今回の調査では植生域を代表する高木層のタブノキやモチノキの出現は僅少で、高木層はコナラ、ハゼノキ、ヤマモモ、アラカシの4種が胸高断面積全体の57%を占めた。一方、本林分では上記4種以外では出現割合は低いものの、多くの樹種が均等に存在しており、比較的多様性の高い森林と考えた。

一般にコナラに代表される薪炭林施業では、樹木の萌芽再生能力を利用することが知られている<sup>2)</sup>。今回の調査では、複数の萌芽幹が1個体を構成する株立ちを21樹種で認めた。このことから、本林分が主に萌芽再生によって成立した森林であると考えられる。

### 引用文献

- 1)山本紀久(2012)造園植栽術 50-53
- 2)真鍋徹・山本進一・千葉喬三(1991)伐採当年のヒサカキ(*Eurya japonica*)の萌芽更新 日本緑化工学会誌 第16巻第4号 1-9